

「わたしが休ませてあげよう」－マタイによる福音書講解説教 54－

詩篇 第34篇16節～19節  
マタイによる福音書 第11章 28節～30節

説教 岡村 恒 牧師

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。」(27節)と主は言って、私たちを招いておられます。

主イエスは、故郷のガリラヤ地方で、多くの奇跡を行い、また神の国について話をして来られました。次から次へと大勢の人々が、主イエスに病気を癒して頂き、悪霊から解放して頂きたいと願って集まって来ました。主イエスは、その一人一人の悲しみや絶望をご覧になって深く憐れみ、癒しを与え、慰めをお語りになりました。律法学者やパリサイ人のように、旧約聖書に記されている律法を大切に、何とかして神の祝福を受けて行きたいと必死に歩む人々も、この群衆中にいました。

この日主イエスは、そういった人々をご覧になりながら、「私のもとにきなさい」とお招きになりました。主イエスの目には、そこに居た人たちだけではなく、今ここに居る私たちの姿もうつっていました。それぞれの重荷を負い、苦労し、疲れ果てている者の姿です。

私たちは誰でも、重荷から解放されてもっと楽に、幸せに生きたいと願います。それぞれに与えられた人生の重荷があるからです。病気や悩み事に限らず、この地上を生きていくこと自体が私たちの重荷です。またこれからのことを考えると、生きることの重荷はさらに絶望的になります。聖書に寄ると、すべての人は神無しに生きようとする性質を持っていて、神との関係が失われた《罪人》です。地上の旅を終え、またこの世界が終わりを迎えた時、すべての人が、ひとりひとり神の前に立たなければなりません。そこで、神との関係がどうなっているのか、はっきりしてしまいます。このさばきの日について、私たちの魂は知っているのです、大きな恐れと深い絶望を味わいます。やがて終わりの日、神の前に立つと考えるだけで、私たちの魂は重荷に耐えることができなくなります。

「すべて重荷を負うて苦労している者」というのは、まさに、この罪の重荷を負っている私たちのことです。

主イエスはこの私たちのために、十字架の「く

びき」を負って下さいました。くびきは、牛などの家畜の荷車を引かせたり、畑を耕すための道具です。一頭一頭の首に合わせて、ぴったり合うように造られます。主イエスはまず、ご自分のために用意された十字架のくびきを負い、私たちの罪のあがないを成就して下さいました。

また通常、二頭の牛を一つのくびきにつないで仕事をさせます。旧約聖書には、「ひとくびきの牛」という言葉があり、土地の広さを測る基準となっています。くびきによって二頭の牛が一つに結び合わされて歩む姿を、ユダヤの人々はよく目にし、知っていました。

主イエスは、「わたしのくびき」と言って、一方にご自分がかくり付けられたくびきに、私たちを招いて下さるのです。主イエスと一つのくびきによって結び合わされて、一緒に歩んだら良いと言われるのです。

本来私たちは、神と無関係な罪人で、神のひとり子、主イエスに近づくこともできないような者でした。ところが主イエスは人間となって地上においでになり、私たちが負うべき罪の重荷を身代わりに負って下さいました。私たちに代わって罪の代償である死と滅びを引き受けて下さいました。このお方、私たちの救い主が、「わたしのくびき」へとこの私たちを招いて下さるのです。主イエスに結び合わされた者として、奪い去られることのない永遠の命を生きる者として歩み始めたら良いと言われるのです。

神は、私たちの罪を完全に赦して下さいます。「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」(エレミヤ書 31章34節)と言われて、私たちの罪を完全に忘れ去って、二度と思いだすことをしないとまで言われます。主イエスが十字架の上で、私たちのために命を与え尽くしてくださったからです。主の食卓は、私たちをこの救い主、主イエス・キリストの命に結び付ける食卓です。

主イエスと共にくびきを負って歩む時、私たちの魂は本当の安息を得、確かな希望に満たされて歩み始めるのです。

(記 岡村 恒)